

REPORT 年代別レポート

小体連

令和元年7月7日。全国小学生陸上競技交流大会広島県予選会。昨年は西日本豪雨災害で大会が中止となった。今年は何とか開催できることとなり、改めて陸上競技ができる環境に感謝したい。今年から新種目の編成があり、コンバインド種目(A:80mHと走高跳、B:走幅跳とジャベリックボール投)、男女混合4×100mRを広島県予選会でも行った。予選会で1位になった選手男女14名が8月9～11日、神奈川県の日産スタジアムで行われる「日清食品カップ」第35回全国小学生陸上競技交流大会に出場した。全国大会当日。昨今の気温上昇にも負けず、熱い走りを小学生達が見せてくれた。男子コンバインドAでは藤井亮太君(御野陸上6年)が80mHで12.56(+0.4)の小学生県新記録で走り、走高跳も1m35cmの自己ベストをマークし、2287点の7位入賞。男子コンバインドBでも迫大介くん(御調西小陸上部6年)が2220点(走幅跳:5m00、ジャベリックボール投48m60cm)の6位入賞。女子コンバインドBの岡崎衣央里さん(三原陸上)、5年女子100mの竹原優佳さん(府中南小)は惜しくも9位。そして他種目でも自己ベストを出し、実りある大会で終了した。今年から新しくなった種目で活躍できたのは日頃から多種目をご指導頂いている各クラブチーム、小学校の先生方のご尽力と感じ、今後も小学生が楽しく陸上競技ができるようご指導、ご協力を願いたい。

指導・普及委員会 副部長
花守 慎太郎

中体連

今年度の上半期のトラック&フィールドを振り返りたいと思う。第65回全日本中学校通信陸上競技広島県大会では、平成17年と20年に樹立された男子100mの広島県記録10秒84を10年ぶりに、河野樹幹(白岳中3年)が10秒83で新記録を樹立した。第53回中国中学校陸上競技選手権大会は、山口県の維新みらいふスタジアムで開催された。当日、選手の欠場もあり、僅差で男子総合3位、女子総合2位という結果であった。男女総合は1.5点差で3位という結果に終わった。猛暑の中、選手は健闘した。最終種目で

1レース前の県立広島リリーチーム

ある男女4×100mRでは、選手全員が応援し、女子の県立広島が49秒92と広島県歴代2位のタイムで4位。男子の昭和北が44秒03のタイムで優勝し大会を盛り上げた。第46回全日本中学校陸上競技選手権大会が大阪で開催された。大会1日目女子走り幅跳びにおいて、藤本佳千(広大付属三原3年)が、予選を5m63で通過し、同日の決勝では5m40を跳躍し堂々の8位入賞を果たした。圧巻だっ

1 山本悠理さんと顧問、家談

たのが、女子800mに出場した山本悠理(大和3年)。予選2分14秒34で2組目を1位で通過。準決勝は2分10秒60で2組目4位のプラス1で通過した。決勝ラウンドではレース展開を読み、200mからラストスタートし、後続を振り切り、2分11秒43で優勝を果たした。その他、多くの選手が全国大会に出場した。全ての選手の今後の活躍に期待したい。

強化委員会 ジュニア強化部長 **渡邊 悦久**

高体連

3月15日(金)～17日(日)に香港で開催された第3回アジアユース陸上競技選手権大会に、広島県から男子やり投の松重安真(広島中等教育)と女子800mの上田万葵(舟入)の2名が日本代表として出場した。初の海外遠征となった松重だが持てる力を十分に発揮し、69m36(700g)を投げて3位に入賞。見事に銅メダルを獲得した。上田も予選を落ち着いた走りで突破し、決勝も2分9秒76で3位に入賞。2名揃って銅メダルを獲得する快挙であった。インターハイ出場を目指す総体予選は、今年も熱い戦いが行われた。5月末に行われた県高校総体では、男子砲丸投で大地智也(神辺旭)が自らの持つ県高校記録を更新する16m07の県高校新記録で優勝。その他にも400mHで栗林隼正(広島国際学院)、やり投で松重安真(広島中等教育)が大会新記録での優勝を果たした。6月中旬に行われた中国高校総体では、男子砲丸投で大地が大会新記録で優勝。男子5000mでは他県の留学生と倉本玄太・中野翔太(ともに世羅)が三つ巴の大接戦となり、倉本が優勝、0.03秒差の2位に中野が続いた。やはり接戦となった女子3000mではテレシア・ムソニー(世羅)が大会新記録で優勝。女子ハンマー投では勝冶玲海(安芸)が全国トップクラスの好記録で圧勝した。その他にも広島県勢は多くの選手が健闘し、過去最高となる132名の選手が沖縄で行われるインターハイへの出場権を獲得した。インターハイ、そして秋に向けたシーズンにおいても各選手の健闘を期待したい。

広島県高体連陸上競技部 事務局長
五日市高校 **野崎 秀和**

学生連盟

広島県学連の上半期の振り返り

広島県学連の活躍を、中国四国学生陸上競技対校選手権大会(中四インカレ)を通して振り返りたいと思う。5月17～19日に岡山県で開催された第73回中国四国学生陸上競技対校選手権大会(中四国インカレ)において、広島大学の女子400mに出場した木戸恵理選手の優勝を皮切りに、女子砲丸投に出場した関菜都美選手も優勝。女子七種競技に出場した安田夏生選手の大会2連覇、男子10000mWに出場した小武海泰士選手も大会2連覇を果たした。また、広島経済大学では1年生ながら女子400mHで藤原めい選手が見事優勝を果たし、男子5000mでも木邑駿選手が優勝を果たした。広島修道大学でも女子三段跳に出場した岡野和奏選手が広島修道大学勢として15年振りの優勝を果たしている。次に6月21～23日にかけて京都で開催された第72回西日本学生陸上競技対校選手権大会(西日本インカレ)でも多くの選手の活躍が見られた。私が特に注目したのは男子10000mに出場した広島経済大学の河原洋太選手である。雨と雷の影響で競技開始時間が遅れたものの、第3位という結果を残した。悪条件の中でも結果を残すことのできる選手こそが一流選手であるのだと感じた。これらの結果を踏まえ、私は特に1年生の選手の活

躍が目立っていたと感じた。1年生の活躍により上級生は刺激を受け、全体の底上げにつながると思う。それらを通して中国四国の学生陸上は、今以上に広島県が牽引していきようになるのではないだろうか。

中国四国学生陸上競技連盟 広島県支部
幹事長 **合田 智哉**

実業団連盟

6月に福岡県で開催された第103回日本陸上競技選手権大会では、木村文子選手の100mH優勝をはじめ、北村夢選手(800m/8位)、萩谷楓選手(1500m/3位)、石澤ゆかり選手(3000mSC/2位)とエディオン勢の活躍が目立つ大会であった。また、この秋「世界陸上2019ドーハ大会」が開催されるが、日本代表として男子マラソンに二岡康平選手(中電工)、女子100mHに木村文子選手(エディオン)、女子20km競歩に藤井菜々子選手(エディオン)の3名が出場する。更に、来年の「東京2020オリンピック」マラソン日本代表選考会(MGC)が9月15日東京都で開催されるが、当連盟からは岡本直己選手(中国電力)、藤川拓也選手(中国電力)、山本憲二選手(マツダ)の3名が出場した。これら国内外の主要大会で広島県勢の活躍が目立つ中ではあるが、今後も二岡選手、木村選手に続く日本代表選手が、ここ広島から誕生することを大いに期待したい。

広島県実業団陸上競技連盟 事務局長
マツダ(株) **江頭 健太**

マスターズ連盟

生涯スポーツを目指せ

第37回県マスターズ選手権大会が6月2日(日)びんご運動公園で開催された。259名の選手が参加し、令和元年の記念すべき大会に、現役最高齢のアスリート富久正二選手(102歳・三次)が100mと砲丸投げに参加された。やはり一世紀の荒波を乗り越えてきた富久さんへの注目度は高い。数多くのテレビカメラが富久さんの力いっぱい歩きの走りを追いかけて、ゴールへと近づくにつれて声援と拍手が大きく大会を大いに盛り上げてくれた。富久さんは、97歳を過ぎてからマスターズ陸上と出会い、100歳から砲丸投げを交えた練習を始め、上寿(100歳)の2017年に、M100(100～104歳のクラス)・60mで16秒98を出した。これは、現在でも同クラスの日本記録となっている。県記録32個、大会新記録60個も出て最優秀選手賞に御厨選手(長距離)・山崎選手(短距離)が選ばれた。運動を生活の一部として、益々健康と目標達成に楽しさ一杯の活動を期待しています。6月30日第103回日本選手権(福岡・博多の森)開催でマスターズ種目1500mに広島県から木村英徳選手(59)が出場した。雨が降ったりやんだりのレースになったが、マスターズ選手にも多くの声援を受けていた。次回、第104回日本選手権(大阪・長居)もマスターズ種目開催予定である。HPは「広島マスターズ陸上」で検索又はアドレス34hmr.comで入力

広島マスターズ陸上 広報 **磯村 公三**

走ることが好き、歩くことが好き、
走る人を応援することが好き、
ワクワクするその気持ち
そう！あなたも陸女!! RIK★JO



織田幹雄記念国際陸上大会観戦記 山本ひかるさん・玉井真鈴さん



私たちが陸上競技と関わるようになったのは大学に入ってから。それまでは、他のスポーツや文化活動一筋。。まったく関わりがなかった陸上部のマネージャーになった。自分が今まで経験したことのない競技のため、選手の気持ちが変わらなかった。しかし、今回、織田陸上をじっくりと観戦して、選手たちは、0.1秒縮めることにすべてをかけていると改めて感じる事ができた。こんなに大きな大会を見るのが初めてだった。スタートの緊張感は一瞬も気が抜けない。この一瞬のために、みんな練習をしているんだとわかった。私たちは短距離のマネージャーだ。長距離のことはよくわからない。でも、長距離種目にも引き込まれた。スタートよりも、ラストパートに目を奪われた。長い距離を走り、ラストパートをかけ、全力でゴールラインを駆け抜ける力強い走り。粘り強さ、あきらめない心に感動した。今回の大会では、名前を聞いたことがある選手や外国人の選手が出ていたので、とてもワクワクした。最近、やっとのタイムが速いのかということを理解してきた私たち。今回の大会では、マネージャーとしても参考になることがたくさんあった。今回の観戦を機に、もっと陸上競技について知りたくなったし、マネージャーとして選手の役に立ちたいという気持ちが強くなった。We are RIKUJO!! 陸上競技は、面白い!!

←山本ひかるさん(左)と玉井真鈴さん(右)

青少年の夢を応援します!

(順不同)

青少年健全育成協力企業

- 株式会社ツルハグループ
- ドラッグ&ファーマシー西日本
- 株式会社サタケ
- 朝日医療専門学校広島校

- 広島駅弁当株式会社
- 中国電力株式会社
- 有限会社道後山高原サービス
- 株式会社中電工
- 広島ガス株式会社
- 広島電鉄株式会社

- 広島総合警備保障株式会社
- 株式会社広島銀行
- 株式会社もみじ銀行
- 大家製菓株式会社広島支店
- アシックスジャパン株式会社
- 株式会社 BTM

- 広島経済大学
- 株式会社合人社グループ
- 株式会社体育社
- 株式会社ニシヒロ
- COCOKALA GROUP
- T&T WAM サポート株式会社

- T&T タウンファーマ株式会社
- T&T ネットワーク株式会社
- 特別協力企業**
- ミズノ株式会社
- 株式会社キリンビバックス



峻険な山々を克服し、
平野を切り開く人。
日本記録を樹立

高山峻野は前人未踏の領域へ

陸上人

FILE0029

広島から日本、日本から世界へ

高山 峻野 | 110mH | ゼンリン | Shunya Takayama

プロフィール	高山峻野(たかやま・しゅんや) / 身長:182.5cm / 体重:73.5g / 1994年(平成6年)9月3日生まれ 1994年(平成6年)広島市生まれ→2007年(平成19年)広島市立中広中学校・入学→2010年(平成22年)広島工業大学高等学校・入学→2013年(平成25年)明治大学・入学→2017年(平成29年)株式会社ゼンリン・入社		
主な成績	2010年 第65回 国民体育大会(千葉国体) 男子110mJH → 第5位 14秒34(+1.5)	2011年 第64回 全国高等学校総合体育大会 男子110mH → 第7位 14秒70(+2.4)w	2012年 第14回 世界ジュニア陸上競技選手権大会 男子110mJH → 出場 14秒06(-0.8)
	2012年 第65回 国民体育大会(岐阜国体) 男子110mH(少年A) → 第3位 14秒22(+1.0)	2012年 第28回 日本ジュニア陸上競技選手権大会 男子110mH → 第6位 14秒46(+0.4)	2015年 第99回 日本選手権 男子110mH → 第1位 13秒81(-1.4)
	2016年 第88回 日本学生対校選手権 男子110mH → 第1位 14秒02(-1.9)	2019年 布勢スプリント 2019 男子110mH → 第1位 13秒36(+1.9)	2019年 第103回 日本選手権 男子110mH → 第1位 13秒36(-0.6)
	2019年 第59回実業団・学生対抗陸上競技大会 男子110mH → 第1位 13秒30(+1.9)		
自己ベスト	2019年 Athlete Night Games in FUKUI - FUKUI 9.98 CUP 13秒25(+1.1)		



広島市出身のハードラー、110m障害の高山峻野(ゼンリン)の快進撃が止まらない。6月2日の布勢スプリントで当時日本タイの13秒36を出して以降、同下旬の日本選手権で同じく13秒36、7月の実業団・学生対抗競技会で13秒30、そして8月のナイトゲームズ・イン福井では13秒25と日本人初となる13秒2台に到達。実に4大会連続で日本記録をマークする離れ業をやったのけた。泉谷駿介(順大)ら若手の台頭で幕を開けた2019年シーズンは、高山の独壇場に様相を変えつつある。

5月の世界リレー大会から「予兆」はあった。男女4人による混合シャトル障害リレー決勝では、米国の強豪選手と互角に渡り合い、銀メダルに貢献。リレーメンバーで同郷の先輩の木村文子が「速かった。おそらく日本記録を上回っていた」と舌を巻くほどの快走を見せていた。

日本選手権では激しい風雨の中、先行した泉谷を100分の2秒差でかわして13秒36で優勝。今秋の世界選手権(ドーハ)の出場切符を手にしたが、「他の選手について行った形だったので、自分自身の力で出したという感じじゃない」といつも通り控えめにコメント。実業団・学生対抗競技会で13秒30をマークし、初の単独日本記録保持者となっても「追い風(1・9m)のおかげ」「実力以上のものが出た」「もう限界まで来ている」と謙遜の言葉を並べた。

そんな謙虚な24歳も、福井での「13秒25」(追い風1.1m)の快記録には喜びを爆発させた。ゴールした直後にタイムを確かめると「よっしゃー」と雄叫びを上げ、掲示板との記念撮影でも満面の笑み。スタートが得意な泉谷や金井大旺(ミズノ)を序盤で引き離し、独走したレースを「プラン通り」と振り返り、タイムには「全く想像していなかった。びっくり」と喜びをにじませた。

兄の背中を追って広島・中広中1年で競技



を始めて以来、その潜在能力の高さで将来を嘱望されてきた。3年時の全国中学校体育大会では4位、広島工大高3年時の6月には中国高校新記録となる14秒10をマークし、7月の世界ジュニア選手権で初の日の丸を背負った。高校時代の恩師である広島工大高の福地光文教頭は「技術的には粗削りだったが、将来性にあふれていた」と振り返る。

明大では筋力トレーニングを本格化させ、メンタルトレーニングも導入。「メンタルを一定に保つために」とあえて消極的、否定的な言葉を並べるコメントは、今では「高山節」として定着した。3年時の2015年日本選手権で初優勝し、ゼンリン入社1年目の2017年には世界選手権(ロンドン)に初出場。予選敗退に終わったものの、大舞台での貴重な経験を持ち帰った。

こうした積み重ねに加え、今季はスプリント力の向上が飛躍を支えている。冬場は筋力トレーニングを徹底し、体を絞上げた。春先の3月には100mで10秒63(向かい風0.8m)をマークし、「風を換算するとベストに近いタイムが出た」と自信を深めてシーズンイン。さらに重心の位置を上げ、スムーズにハードルを越える練習も徹底。心技体の全てがかみ合った成果が福井でのレースだろう。シーズン序盤は「全く勝てる気がしない」と繰り返し、日本選手権でも同タイムだった泉谷に0秒28の大差をつけた。

今後は大きな目標が控えている。世界選手権だ。「前は予選落ちしてしまっただけで、今回はしっかり走って、準決勝の景色を見て日本に帰りたい」と意欲をにじませる。13秒25は今季の世界ランキング9位。同種目で日本人初の決勝進出も夢物語ではないが、「このタイムを世界で出すのが難しい。安定して出せるようになったら話が変わるけど、今のままでは厳しい」。いつも通りの「高山節」に、周囲の期待は高まるばかりだ。

「高山」の名字と絡め、「峻険な山々を克服し、平野を切り開いていくような人物に」という両親の願いを込めて命名されたハードラーは、日本の110m障害では前人未踏の領域に足を踏み入れた。広島から日本、日本から世界へ。決戦の地・ドーハでの跳躍は、2020年東京五輪への道も切り開く。 text by K



世界陸上競技選手権大会 出場おめでとう!

TAKAYAMA 高山峻野 SHUNYA

ゼンリン



高山峻野君、ドーハ世界陸上競技選手権大会出場、日本選手権優勝、2度の日本新記録、2020東京オリンピック標準記録突破、おめでとう!すごいことが立て続けに起こって嬉しいということを超えて驚いている。調子のいいときに怪我が起きやすいもの。怪我をしないようにと祈っている。昨年10月のジュニアオリンピックでは、高山君はプレゼンターとして、私は口田中学校の浅木さんの引率として大会に参加していた。会場で彼と話をした時に、次年度に向けてのプラン、東京オリンピックへの思いを彼から聞いた。4月のアジア選手権のため今までより早い時期に冬季の練習に入る。そのため国体には参加できないとか、アジア選手権のため同時期の織田陸には出場できないとか、彼は広島県に思い入れが強いので、本人としては非常に残念だったようだ。東京オリンピックのためランキング上位に入りたい。そのためにはアジア選手権、世界選手権で結果を残したい。彼は恥ずかしがり屋なところが、自分の思いを持っていてもあまり人には話さない。今までの彼と違う所をその時感じた。今年の1月にU20オリンピック育成競技者合宿が、味の素ナショナルトレーニングセンターで行われ、私も引率として合宿に参加していた。10月に話した時、普段の練習はナショナルトレーニングセンターの陸上トレーニング場で練習していると言っていたので、会うのを楽しみにしていた。2回ほど合宿のスケジュールと彼の練習が同じ場所になったので練習の様子を見た。1回目の練習はレジステッド走、2回目の練習はウエイトトレーニングをしていた。中学生の頃の彼は、スピードとハードル技術は優れていましたが、体も細く長い距離の練習やパワー的な練習は嫌って避けていたように思う。レジステッド走はインターバル的に何セットも行ってたし、ウエイトトレーニングもぶつぶつ言いながらも苦しそうだが、よい表情をして意欲的に取り組んでいた。嫌なことも自分から進んでやろうとする姿を見て、「昔と変わったね!」と彼に言った。大学からのコーチも「彼も成長していますよ」と言っていた。自分の思い(目標)を持つことで、自分の中で何かが変わってきたのだと思った。2回目の練習にアジア大会の銅メダルをわざわざ持ってきてくれて見せてくれた。メダルを私の首に掛けてくれてコーチが二人の写真を撮ってくれた。昔から周りの人を気遣う優しいところがあった。陸上競技者として、また、人としてどこまで彼が成長してくれるのか楽しみだ。彼はハードル競技に対しての自分のイメージを追求しているように感じる。記録や順位だけでなく、理想とする自分をこれからも追求してくれることを祈っている。

中広中学校(現口田中) 顧問(教諭) 田川 司

高山の高校時代、担任としてクラブ顧問として3年間を過ごした。現在は陸上競技の指導からは離れているが、「高山ウオッチャー」は変わらず続いている。高校では十分な結果を出させてやれなかったが、力任せで荒々しく、果敢にハードルに向かう姿は、それはそれで魅力に溢れる選手だった。未完の利器として、将来を嘱望された。高校卒業後は年を重ねるごとに洗練されていった。レースを見るたびに「左足首が少し立つようになったな」とか「右肘が少し上がったな」このところは「タッチダウン時の軸ができたな」など、いくつかの気づきを私なりに分析しながら楽しんでいる。こうした大なり小なりの動きの変化には、良し悪しは別として必ず理由があり、それが全体像を形成することで個性がうまれる。そして陸上競技の本質でもある合理的な動きに近づくにつれ「美しさ」として表現される。強い選手の動きはどれも美しい。高山はもともと「未完成の美しさ」があったが、次第に「洗練された美しさ」へと変化してきた。いつか「完成された美しさ」を魅せてくれるだろう、その時をじっくり待ちたい。

広島工業大学高校 元顧問(現教頭) 福地 光文

FUTAOKA 二岡康平 KOHEI

中電工陸上競技部

この度、当社陸上競技部 二岡康平がドーハで行われる世界陸上マラソン代表にチーム初、創部30年目という記念すべき節目に選出されました。2月の別大マラソンで4位に入賞し9月15日に行われるMGCの出場権を獲得しましたが、本人としては今の実力で東京五輪へ挑戦するよりも、更に経験を積み2024年パリ五輪へ挑むビジョンを描きました。出した答えはまず日本代表としての経験を積み、心身共に成長させていく事でした。この選択を大きな収穫とするため、私自身もスタッフとして日本代表の責務や重圧は大きいですが、日頃お世話になっている方々に結果で恩返しできるように準備していきたいと思っております。

中電工陸上競技部 監督 松永 信也

二岡康平選手からのコメント

この度、世界陸上日本代表として選出され嬉しい思いと共に、結果を残さなければならない責任も感じ充実した中で競技に取り組んでいます。世界の舞台に立つにあたり様々な方々の期待やご支援をいただき感謝の気持ちでいっぱいです。本番では8位入賞という目標を掲げ自分の持っている力を一杯発揮して頑張っていきますのでご支援よろしくお祈りいたします。

KIMURA 木村文子 AYAKO

エディオン女子陸上競技部

小学校6年生からハードル走を初めて、21年間。たくさんの指導者・仲間を支えられた陸上競技人生でした。21年前は、80mハードルが全国小学生交流大会の正式種目になった年でした。県予選を見事に突破しての初の全国大会。予選前の練習で転倒し、もうダメかと思ったが「気持ち楽になった。」とあなたの精神的な強さを感じました。10月の県民大会では、80mハードルで大会新記録(12"3)は、今も広島県記録として子ども達の目標の一つになっています。あれから、大きくなっても克服して、世界で活躍している姿こそぞという時の強さに、とても頼もしく感じています。世界陸上をステップにして東京オリンピックへ道、決めたやすい道ではないけれど、「大きな夢に挑戦」する姿を多くの子供達や仲間とともに見守ってきたい。

可部南小学校元教諭(現広島陸協事務局長) 灰原 利彦

